

# 景観

LANDSCAPE

# KEIKAN

上越人のDNAを探る



# 景観

LANDSCAPE

# KEIKAN

上越市景観形成情報誌「景観」第8号

〒943-0832 新潟県上越市本町5丁目5番9号 ランドビル2階 上越市役所 街なかサテライト内 文化振興課  
頒価 100円

この情報誌は再生紙を使用しています。



特集

大きな日時計

## なかのまた時間のながめ

活動レポート  
地球環境学校

私だけが知っている、とっておきの場所  
ぶち景観みつけた

私達にとっての近代化遺産

中

ノ俣小中学校郷土調査クラブの子ども達と先生方の手で作られた「中ノ俣、上綱子一ふるさとの歩みと現状」という冊子があります。

気比神社は南北朝時代に敦賀の気比神社を招いて祀ったものであるとか、上綱子との間にある薬師山は春日山城の砦の一つではないかという専門家の説（中ノ俣には、ほら貝が鳴れば春日山城に駆けつける「城付百姓」であったという言い伝えがある）、谷底から吹き上げる強風、タカオチに耐えながら冬の道珍坂を越え、中ノ俣の大きな生業の炭を背負って高田へ売りに出た苦勞、帰りに愛の風の店屋で煎餅や飴玉を土産に買う楽しい思い出、村の婚礼、祭り、お婆さんの一生の聞き書きなど、「村」の日々の暮らしが生き生きと書かれています。

冊子がまとめられてから20年、その間に少しずつ人口が減り、子ども達の数が少なくなって学校は閉じられました。

しばらくして、学校は地球環境学校に生まれ変わって、自然と触れ合う子ども達の声が聞えるようになり、辛い作業を強いる棚田は「棚田学校」に変わって、自然環境を守りながら安心な米を作りたいという人達が集うようになりました。

指導やお手伝いをする地元の人達、NPOの若い人達との交流も始まりました。



特集

## 大きな日時計

# なかのまた時間のながめ

山

間の集落は「旅の人」を退け、隔絶された不便な過疎地という印象があります。しかし中ノ俣では、いつも誰でも、おおらかに迎え入れてくれます。訪れるたびに、その「源」はどこにあるのだろうかと思えます。

中ノ俣は近代に至るまで、桑取谷や西頸城の谷筋を縫うようにして信濃へ続く、塩や海産物の重要な輸送ルートで、茶店や宿もあったといえます。

今の中ノ俣からは想像もできないような物の交流のなかで、旅人を迎え送り出す、もてなしの心が育まれていたようです。

そして、今も脈々と生きるその力は、中ノ俣の自然が変わることなく刻む「なかのまた時間」に、人々が生きているからかもしれません。

この時計は、自然をつかさどる神さまたちの声を聞きながら、伸縮自在の時を刻み続けているのです。

※1 上越市地球環境学校は、NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部の手で運営されている。  
※2 旅の人とは、よそ者あるいは、よそから来た住民のこと。



“炭焼き” 炎の命を吹き込むかのようだ

# はじける

毎年毎年、雪は降りつもり、ブナの森に柵田にどっしり居座る。大量の水の源が無言の雪塊となつて、雪解けの日を待ち続ける…。遅い春までゆっくりと刻む時計に見守られて。



風に踊る叢、乾いた雪を踏みしめればキュッキュッと鳴る。

賽の神は風に大きく揺らいだ炎に乗り移り、ずっと昔から、雪に

埋もれる村に新しい年の始まりを告げてきた。

冬籠り—というが、実は籠もってなどはいられない。雪の中でこそ忙しい。秋まで使った農具の修理と藁仕事。カンジキも藁や笠も手作り。山の木の伐採と搬出も雪中だからこそ。

晩秋には、ナラやブナを伐り出して炭焼き。石油が日常の燃料になるまで、中ノ俣は高田から新井にかけての薪炭の供給源だった。ショイコに背負って長い山道を辿り、販路を広げた。今は、除雪された道路で高田に通じるが、それでも早朝は凍結して滑りやすい。朝市に出る朝など、ベテランでもこわごととハンドルを握る。

賽の神の前に築かれた雪の祭壇にお神酒が並び、主立が祈りを奉げて、いよいよ点火。賽の神は一気に燃え上がり、竹のはじける音が山々に響き渡る。火の手が納まり、賽の神のお裾分けに与かろうと持参のすめ、ちくわ、餅を竹竿の先に吊るして火にかざす。



久しぶりに子どもや孫たちが訪れ、薄暮ときの静かな山里に新年を祝う声が響く。

炎にかざす吊るし物は各人各様。ばあ達の元気が光る。



風の神と火の神がたわむれて、炎が腕を持ち上げる一瞬。



一本の木に人々の力が集まる。



伐採する杉は樹齢70~80年。既に枝打ちされてこの日を待っていた。倒す方を慎重に見定める。根元の谷側に手斧で受け口を拵える。バランスを計りながら徐々に鋸を入れ、そして、ゆっくりと倒れていった。

昔中ノ俣のケヤキは、鉄砲虫(キクイムシ)が入りにくいので上等用材として木曾や名古屋方面の木材市場に出された。晩秋に田んぼの仕事が一段落しても、1月半ばまでは山仕事が続いた。



ちょっとこわかったけど、楽しかったよ。

今日の「大持引」は、後世に伝えようという有志の手による。見物にはほどよい吹雪模様だ。藁笠姿の男衆はみな伊達者揃い。新雪を踏み踏み、身軽な動きでそれぞれの持ち場につく。

藁だけでなくウリノキ(ウリハダカエデ)の甘皮を細長く裂いて作った藁もある。すべて手作り。カンジキも平場のものとは違い、「山カンジキ」だ。

今日の伐採は杉。枝打ち、伐採、搬出と冬場の仕事を再現する。大持ちソリに子ども達を乗せれば、綱を曳く人たちの歓声が吹雪を凌ぐ。締めはお待ちかねの酒宴。

# めざめる

春の日時計は陽光を浴びて、めまぐるしく回り始める。  
苗準備、畦の修理と水路点検、道具の整備…。



**青**空のもと、緑の森に抱かれた棚田の風景は日本の心のふるさと。

あちこちに「里山」<sup>ひょうほう</sup>を標榜する地は多い。ところが、どこかツクリモノ的でキレイ過ぎる風景が垣間見える。わざとらしい施設、他所で作られたお土産品、見栄え良くするための工夫、見え透いた郷土のシンボルが空しい。

中ノ俣には、伝承されてきた暮らしへの確かな自負があり、日々の糧を自給自足してきた山里の底力が途切れてはいない。刈り取った畦<sup>あぜ</sup>の雑草、去年の古株さえも田んぼの肥料になるといって大切に扱われた。何も捨てない時代を生き抜いてきた「真実の村」がそこにある。

「年とっても身体の動くうちはここに住んで、ここで死にたい」

「まちに出た子どもは、祭りには孫を連れて来るし、農作業の手伝いにも来てくれる」

「一人暮らしでも家の修理を怠らない。死んでも家は残したい」

しかし、村の景色も少しずつ変わってきた。主要な生活用水だった川が生活排水の流入で、飲み水は水道になった。

それでも中ノ俣の空は広がり、昔からの街道筋は「旅の人」を受け入れる気風が残る。新参者を拒まないその気風で、訪問販売に騙されるお年寄りも多いそうだ。訪れたら、まずは笑顔で挨拶を…。



気比神社の祭りは村じゅうで二日間じっくり楽しむ。

棚田では「びびら」が活躍



神楽じゃなくともごうに何かあるの？



刻々と水面の表情を変える棚田



通称「バタコ」の川端さんは陽気な田んぼ係。



コシヒカリの苗が運び込まれて、植付け位置決め「びびら」の使い方解説。



今日は1人で参加の山田さん。びびらに挑戦。



びびらの筋にあわせて植える。



昨年春に閉店したよろずや秋本商店。「伝説のアブラアゲ」再現するか？



家の庭先にも野菜と草花を育てる。きゅうり棚は雑木の枝で。プラスチック製品は少ない。



**現** 実の棚田の耕作は大変である。小回りのきく小型機械を使いながらも、昔からのやり方を伝えていく。「角間の棚田」で一年間にわたって開かれる「棚田学校」は、その実践の場。NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部が主催し、地域の皆さんが講師を務め、一年を通して米作りを学ぶ。

生徒さんも様々。家族連れは子どもたちが可愛い。ヨサコイの振付けで田植えに励む。菅笠に緋の着物、縞のもんぺの早乙女姿は、NPOの女性たち。山仕事も農作業もベテランになった。ここで学び、村の暮らしに溶け込んで、若い刺激を与えながら、村の豊かさを分かちあっている。

# なかのまた イトセトラ



知る人や知る中ノ俣の野生自然薯。

里芋の「きぬかづぎ」は、自然の甘味。

自然の餌で育った鶏の「つとこ卵」薬で器用にくまれている。昔から裏山に豊富に生えていたタマウラベニタケは最近になってキノコ博士の認定で食用になった。お馴染みナメコもおいしそう！

ぜんまい  
持ってきたぞね

移動スーパーは中ノ俣の大切な台所。お母さん達の楽しみでもあるのかな？ 笑顔の素敵なおんちゃんとおオリジナルテーマソングの「おんちゃん号」刺し身だってある！プリンだってある！



塗りのお平にあまじょい汁のたっぷり染み込んだ大きな油揚げ（閉店してしまった秋本商店の特製）を敷いて大きのまま煮しめた野菜や蒟蒻を並べたお正月のご馳走。油揚げはやはり最後のお楽しみ？



（びびら）

# そよぐ



中ノ俣川は南葉山を源流にし、深い谷間を縫うようにして流れ下り、途中で綱子川と合流。さらに下綱子で桑取川と合流して有間川で日本海に注ぐ。桑取川主流の景色

は川の両側にやや広がりのある平地が続き、その向こうに低い山並みが連なる。その緩やかな連続が優美な印象を奏でている。

中ノ俣は、上越市の水瓶「正善寺ダム」とは流域が異なるものの、「高田駅方面」という標識がいくつもあるように、歴史的なつながりは桑取方面よりも春日山や高田に近かった。

谷筋をなぞって蛇行する中ノ俣への道は、屈曲も昇降もかなり複雑だ。いつも方向感覚は定まらず、狐につままれて川べりをさまよっている気分だ。

家々は道から高い位置にあり、納屋も畑もお墓も、道端に草花が咲きそろう坂道でつながっている。足腰が鍛えられるはずだ。

人々の夏は、朝早くから仕事に出てしまうから昼間はとても静か。川の水音、草の葉擦れのささやき声、風のそよぎが耳をよぎっていくばかり。

家々の裏にある「タナイ」と呼ぶ雪消しの池も、この時期は緑色の水面の下に鯉が潜んでいる。

盆踊りの夜、公民館前の路上に組上げられた紅白幕の櫓。囃子太鼓を打ち踊るのは、町から戻った青年会の人達を中心に山里ファン倶楽部の若いスタッフも混ざる。彼らの地道な活動が地縁血縁の外にある若者達との接点となり、伝統行事のやり方も少しは変化してきているのだろう。

夜も更けた頃、踊りの輪に村人が増え、大人はビールとモツ焼きの煙に包まれて談笑。

元宮橋まで歩けば、もう盆踊りの賑わいもかき消される。川の水面上に家々のほのかな明かりが揺れて、お寺の参道に掲げられた盆提灯が暗闇ににじむ。



帰省した家族と浴衣姿の子ども達が、ヨーヨー釣りや輪投げで遊び、賑わいが広がる。

夏の昼下がり、短くなった時計の針の進みは遅い。



「市民の奥座敷 中ノ俣自然休養村 明るく住みよ。村づくし推進 中ノ俣地区協議会」今も堂々、集落の中心に立つ。



村のはずれの昭栄橋のたもとに牛小屋があり、シロの居場所がある。誰の犬というわけでもないが、いつも尻尾を振って愛想のいいシロ。



集落入り口を守るように並ぶ。左の猿田彦神は天保14年に山崎さんが建立。「右 酒やちか道」と彫ってあるらしいが、ほとんど読めない。どんな酒屋があったのだろうか。



阿弥陀堂に鎮座する子宝・安産祈願のお守りも気比神社の赤い鳥居も、みんな集落の人達の手作り。



「あんちゃん号」は定期便の移動スーパー。テーマソングが聞こえると、お年寄りが三々五々と集まってくる。次回の御用聞きも務める働き者だ。



# ろばた 談議

我輩はこの「やすらぎの家」に寓居するねずみ。空き家になった古民家を「たき火会」の面々で少しずつ修理しながら会合や催しに使い始め、居心地が改善された。桑取や名立谷と同じ系統の木工の手になるもの。萱葺の上にトタンを被せているが、茶の間を樺の通し柱が囲み、根曲り杉の梁で合掌の根元を固めて屋根を支えている。会長石川正一さんの本業は木工。若い頃は関西方面に出稼ぎに出ていたこともあった。石川昌司さんは木挽きと狐を営み、農業も土木作業も万能。山の達人といえよう。今日は客人らしい。両人は蚊取り線香を焚き、囲炉裏に火をくべて酒と肴の準備に余念がない。我輩の聞き及ぶこともあれば、この夜、初めて耳にすることなども数々。梁の上よりその一端をご披露しよう。

## 街道の村

正善寺・上綱子・中ノ俣・桑取・名立・早川・能生川の谷筋の集落を縫って青海の上路を貫く山往來は、人と物資の往來を担うもう一つの街道であった。春日山からの軍道も「塩の道」と呼ばれる道もあった。車のない時代は人の往來に便利な道筋が「そこらじゅうにあった」ものだ。兵糧米を素早く春日山へ運び込むための中継点「俵隠し」、米を盗まれないように主道から少し奥まった水はけのよい土地を選んだ。「弓屋敷」「矢渡の谷」など、軍事に関わる地名や痕跡も残っている。



## 炭焼きの話

昔は窯が60以上もあり、炭は大きな現金収入。南葉山は中ノ俣集落の領分。炭焼きの木を求めて南葉山まで杉道を伐り開いて、高田ばかりか新井まで販路を拡大した。

## 受け容れる気風

演芸の巡業・興行は楽しみだった。村にも芸達者が豊富。中ノ俣劇団を作り遠征に行ったほど。飲めば、歌や芝居、出し物に尽きることがない。

ここで、正一さんが「牧場小唄」の一節を艶のよい声で披露する。

雪が消えれば牧場の～ 広い荒野に増す緑～ 草は伸びるし、増やせや、肥やせ～

このおおらかさが山里ファン倶楽部の発足を転機に、色々な場面で若者たちを風景の一部に受け入れてきた。新しい世代や新参者を受けとめるやり方は人それぞれ、すべての村人が活動に参加できるわけではない。若者たちの立場も考え方もひとつではないが、活気と明るさが増した。

## 「市民の奥座敷」その心も奥深い

昭和54年、当時の農林省が「新農業構造改善事業」を実施。農村再生を目標に7割という高い補助率だった。「中ノ俣でできるなら全国どの村でもできる」という意気込みだった。中ノ俣橋の際の「市民の奥座敷」という看板に名残をと

どめる。

その一環で「山菜祭り」を開催した日は、高田から車が押しかけて、延々寺町まで数珠つなぎ、交通整理に汗ダクになったのは今も語り草。

その後、農業の機械化が進んで「なかのまた時間」の流れは変わった。なぜか国の事業も打ち切りになった。

村の寄合いは、定刻から1時間遅れがあたり前の「中ノ俣時間」。行政の職員を交えての会議となれば定時開催が厳守され、時間を守る習慣が身についた。以来、村の寄り合いにも遅れる人が減ったのはよいことだったが…。それは、中ノ俣の生活と環境、暮らしのリズムを考えれば、よいことではなかったかも知れない…。

しかし、このままでは確実に村の将来は成り立たなくなる。若い世代がここで暮らしていくためには、自助努力だけでは限界がある。その意識は、政治・行政との結びつきを真剣に考え、選挙運動にも熱を帯び、村の団結意識も高い。昭和51年の県知事の訪問には村人総出で、日の丸の小旗を振っての歓迎。インフラ整備も徐々に進み、道も舗装されて、車なら30分で寺町に出られる。

## 狸汁と狸の運命

いつか畏にかかった狸。黒い瞳がいじらしくったという話から、狸は12月から1月にかけて捕まえるヤツは一番脂がのって旨かった…。昭和10年ごろまでは、テン・イタチ・狸を獲って毛皮を出荷していた。あの狸の運命は如何に？

おや、ウトウトする間に寝も果てた様子。

# なかのまた エトセトラ



地球環境学校の踊り場に・・・二目と見れない恐ろしさの「猫又」の絵がある。

夏祭りは中ノ俣の実家に帰って来た子どもたちや孫たちで賑わう。素敵な浴衣の母娘・・・なんと風呂敷を剥ぎ合わせて仕立てたとか!とても綺麗。お母さんは紫、娘さんは赤で。

天和三年、中ノ俣に現れた人喰い怪物「猫又」の身丈九尺の殺され、何人も喰い殺された。高田の役所から遣わされた五百五十人の人足、軽も仕留める事出来なかつた。中ノ俣の五尺八寸の末に仕候の五尺八寸の末に仕留めた。吉十郎。吉十郎の名は天下に伝わった。中ノ俣の百姓は春日山の御納戸百姓といふ事。鉄砲などを持つ事。を許されていと言われる。

なかのまた 夕又きの 行く末

昭和20年から30年代。中ノ俣の狸の毛皮は浦川原の業者が買いとって行った。東京で襟巻きに、または角巻きに・・・合掌。



# いただく

その先は抜けるような青空。秋色に変わる山々に、長くなった日時計の針がくっきりと浮かび、白い雲が戯れている。



**棚**田学校の稲刈りの日。予報とは裏腹に強い陽射。まず講師の川崎静枝さんが、稲の「まるけ方」の講習。ひょいっと器用に回すので簡単に見えるが、これが難しい。腰に結わえた藁で結ぶ時、稲束はばらける。しっかり縛らないと、乾燥した時に落ちてしまう。田植え、草取りと手間をかけて、今日は一番楽しみにしていた稲刈りの日。

「2年目で我流のまるけ方だけど」と言いながらも、早くも頸城の大嶋さんが手際よく刈り始める。小学生の美紀ちゃんも手伝う。

神奈川県森さん一行は、「稲刈りの儀！」と宣言。一刀目はオーナーの森さん、オレンジのつなぎが鮮やかだ。田植えから草刈りまで一人でやりとげた。稲刈りは会社の仲間5人と一緒に。笑顔で「稲刈りの歌があればいいのになあ」。



単身赴任の山田さんは、上越出身の奥さんと娘さんと。単身で田掻きから頑張った。少し青い稲を見て「まだ早いんじゃないかなー」。ボランティアの水路掃除、草刈りと、中ノ俣に通って田んぼを見張ってきた山田さんは気がかり。「食べるとまた田んぼやりたくなるだろうなあ」。

地元の夫婦はハサ架け。誰の稲かわかるように、縦列ごとに架けていく。投げるおかあさんとハサに登って架けるお父さんの呼吸はぴったり。

「こんちくしょうって投げるんだよー」と、お母さん。  
子ども達が「なぜ干すの？」と問えば、「乾くと美味しいお米になるんだよ」と答えるお母さん。子ども



ハサ架け名人

太陽の恵みがぎっしりの大根



達は、みんな仲良しになって遊んでいる。糞虫観察、犬のシロをかまったり…遊びには事欠かない中ノ俣。ときには稲を小さな手で脱穀しちゃったり…。

こういうことが生き方の教育につながる。野菜も名前だけの「地産地消」ではない。米づくりは、牛糞に刈り取った雑草を漉き込む。無駄も余分もない。その上、究極の「ハサがけ米」。青空市は、並んだものだけをその場で手にする。「いつでもどこでも買える」にはない喜びがある。

**待**ちに待った山菜祭り。既にやすらぎの味は大混雑。卵の「つとみ卵」は希少品。白黄色の卵は即刻売り切れ。大根、ヤブ草、銀杏にかぼちゃ…。茶の間では、きのこ汁、赤飯、手打ち蕎麦に酒とビール。自然薯は天然コブ付の野生派。豪勢に蕎麦粉に練りこむ昌司さん。蕎麦打ちは名人の栗崎和義さん、田中竹治さん。それに、山里ファン倶楽部の三浦さん。興味津々の子ども達も取り囲み、見ればやりたくなるのが蕎麦打ち。ついに子ども達も交替で蕎麦職人体験。

それぞれ買い物袋にどっさり仕入れて、今夜の食卓が楽しみ。お客も売り手も素敵な笑顔。卵も大根もヤブ草からもほほ笑みがあふれている。  
腰が90度(?)に曲がったまま、カートを押して坂道を登って来るおばあさん。聞けば、手作りゼンマイを水で戻すやり方を若者達に見せるのだと、ニコニコ顔。

## 刈り上げの夜

和気あいあいの乾杯後、自己紹介。地元から、お馴染の石川昌司さん、石川正一さん、栗崎和義さん、川崎静枝さん。スクリーンに今年の米作りがすべて映し出される。

昌司さん「みなさんが来てくれて、にぎやかになって、元気が出る。牛の糞を田んぼに入ると、米が丸くなるが、みなさんの米は稲が綺麗だ。いちばん綺麗なよい米になる。棚田学校の米は、初めは瘦せていたが、地球環境学校三人娘(川端・三浦・松川)の草刈の賜物で、いい米になった」

森さん「半自給自足を目指したい!」

大嶋さん「外仕事でなれているので、これからもがんばりたい」。

奥さんも、きつとがんばりそう…。  
埼玉の山本さん「日焼けして、きつかったですよ。腰いたくてね、暑かったし」。  
と、地酒をつくづく美味そうに呑んでいる。  
静枝さんはやさしい素敵な笑顔で「いろいろな人に会うのが楽しくてねえー」。



「何かを成しとげる喜び」が、棚田の稲と一緒に育ち、努力を積み重ねる人の心の美しさがあり、空の青と山や田の緑は、人々と一緒に包み込んで背景となる。

お米は「大切に慈しみながら食べなければ」、改めて米作りの長い時間を心に刻む。





中ノ俣小中学校は村中が協力して校舎を建て(平成3年までは木造の校舎)、雪かきやカ  
ンジキの道付け、単身赴任の先生と飲み明かし、地元の食材で給食を作り、運動会を盛り  
上げてきた。昭和40年代までは、100人以上の子ども達が学び、まさに「学校」は村の  
シンボルだった。その学校も最後の2年間はたった一人。そして平成11年閉校したのだった。

地球環境都市「上越市」の看板が中ノ俣に掲げられ、中ノ俣小中学校が上越市地球環境  
学校に生まれ変わって約10年。

NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部が運営に携わる女性スタッフ4人に聞いてみた。

### 「なぜ&いつから、ここに来たの?」

☺: 前身の小中学校時代の12年間、給食調理員をしていて、環境学校で10年続いている。

☺: 地元の林業NPO「木と遊ぶ研究所」に森林で関わり、「かみえちご」の立上げとスタッフ育成に、「お前は声がデカイから環境学校に行け」といわれて7年。古株です。

☺: 大学から有機農業と流通に関わり、自給自足をやりたかった。3年前に「タバコにびったりのところがある」という知人の紹介で募集を知って来た。

☺: 知床でネイチャーガイドに携わっていた時、環境教育に興味があり直接、環境学校に問い合わせた。6年目になる。里山も子どもも動物も大好き。

地元出身ではない3人。それぞれ林業・農業・教育の視点からここに集まった。3人とも農山村の景観は見慣れたものだったから、自然環境に対する意識のギャップはなかった。だが「人」に対するギャップはカルチャーショックだった。

☺: こんなに自然と一体になって、どんな作業も自力でこなしてしまう。そんな人々が他所から来た私達を温かく受け入れてくれる。初めから、何でも教えてくれる。

☺: いまだに、ここの人々が様々なことを難なくやってしまう、その力に驚きを感じる。



松川菜々子さん



川端夕子さん

それに、魅力的な人柄の人ばかりで、風景と人間と生活がひとつの絵になる。

今、県道から来ると、いきなり中ノ俣集落が現れるけれど、昔の正善寺経由の道筋には点々と集落が繋がっていた。冬場に荷を背負い、徒歩で「道珍坂」を越える時の吹雪を凌ぐ様子が目に浮かぶ。

### 「かみえちごの活動を通して感じることは?」

最近、上越市の環境に対する取組みが発足時と変わってきたと聞けれど、現場では?

☺: この教育プログラムは知識の獲得ではなく、生き方の知恵と技術を習得すること。上越市の環境も景観も誇るべきものだし、育てるフィールドはとても豊かで発信できるものが多い。でも、少しずつ市の環境教育が変わり、予算は毎年減るしスタッフも縮小せざるをえない。そんな中、自分たちでコンセプトを立て、企画体験講座を練り実践してきた。住民説明会や市議を交えた話し合いもたびたび。都会の子ども達や親子、家族ごと受け入れて様々な体験を試みる。子どもだけで、集落へおつかいや取材に行き、初めての家で「おやつ」をご馳走になってくる。こんな体験は都会ではできない。「生きている里山」と、それに包み込まれる人々との交流すべてが環境教育の原点。「その土地とどう関わっていくか」、小さい試みだけど全国的にも注目されている。この日本的環境教育は、理論と保全中心の欧米の思想とは根本から違う。先生方も環境と一体の実体験が基盤だと気

づき始めた。

☺: しかしまあ、子ども達の行動にはびっくりすること…。箸や茶碗の持ち方、靴紐も結べないし、風呂敷で物を包めない。親もすぐ「きたない、あぶない」と止める。

☺: 山道の段々を登りはしても、こわくて降りられないし、見るからに折れそうな枯れ木にも登ろうとする。折れるということも、危ないということもわからない。

☺: ちょっと危険なことも、知恵を働かせれば危なくないのに。安全対策は悩みの種…。実際に刃物を持たせて削らせたいけど、先生はダメと言う。裸足で石ころ道を歩けばすごく痛がる。

☺: 最初は虫を怖がっても、私たちが平気で触るのを見るうちに「かわいい」と言い出す。結局、周囲の大人や親の反応をコピーしているだけ。でも、それがわずか1日で、子ども達が目に見えて変化してくるのが面白い。上越教育大学附属小学校の子ども達のように、定期的に通って来るとすごく変わる。

☺: こうやって若い人たちが来て、子どもが訪れて活動してくれるのがうれしい。

そこに昌司さん登場(タバコの火を指でもみ消しても平気な縄文人のDNAを残す人物)

☺: 彼らが来てから刺激を受けて若返ったさ。村のシンボルの学校に子ども達の声が入って、賑やかになって、いいことばかりだ。子どもは、もっともっ

とけんかして泣けたい。そして誰にでも挨拶する声が響くようになる。だいたい内緒話のできない土地だ。

### 「これからの展開と夢は?」

☺: 桑取地区も一体となって「人」がいるからこそ、環境が守られる。学校はその拠点のひとつで入口。教育に性急な結果を求めてはいけないと思う。私たちもこの暮らしの環境や村の衰えを食い止めるところまでの力としては、まだ足りない。でもプラスに向けていきたい。

☺: 色々な形でもここに住む人が増えて、学び舎の復活を願う。新しい形のフリースクール、週末寺子屋とか。活用したい空き家も何軒もあり、人のつながりを広げていきたい。

☺: 今春、離職して一時は離れるけど、環境や農業に関心の高い都会のお金持ちを送り込んで「ナカノマタン(中ノ俣人)」にしておこう。本当にここに来たい、住みたい人を増やしたい。

1年間の「景観」取材で、来るたびに驚くほどの発見が毎回あった。閉校後、ブランクなして始まった環境学校が中ノ俣の暮らしや景観を守ることにつながり、若い世代が行き来して未来を育てていると、実感した。



宮本フクさん



三浦絵里さん

(出版案内)  
「未来への卵」-新しいクニのかたち-かみえちご山里ファン倶楽部の軌跡 3,000円  
「ナカノマタン」 2,000円(小学校の総合学習副読本に最適)

(本レポートは、平成19年度の取材をもとに作成)

私たちも自然の一部 それが環境学校で学ぶこと

# 地球環境学校



私だけが知っている、とっておきの場所  
ぶち景観みいつけた



# 近代化遺産 ってなーんだ

昨日までちよんまげ姿だった明治の人達は、あっとい  
間に、日本に「近代」を作りあげました。電気を作り、  
トンネルを穿って鉄道を通し、モダンなレンガやコンク  
リートの建物を次々に作ってきました。その「近代化遺  
産」をぶち景観の眼で見回してみると...



北陸線谷浜トンネル  
今は久比岐自転車道のトンネル



昭和の初めから妙高山の真下の山奥で電気を作っています



ぶどうの装飾がモダンですね。



レンガ造りの燈籠  
大正4年に開通した北陸線のトンネル工事の  
余りのレンガで造った？長浜の阿比多神社



カナダの宣教師・ヴォーリスの設計の教会は  
現存するものとしては県内で唯一



信越線矢代川鉄橋橋  
脚の一部が建築当時の石積みのみらしい



明治40年の発電機  
上越に初めて電灯をと  
もした蔵々発電所のも  
ので、今は大手町十字  
路にあるよ



内側は立派な日本庭園



これも近代遺産  
二宮さん？ いえ野口英世  
南本町小学校の校庭で



昭和初めに建てられた銀行 旅行者も覗いていく



「活動大写真」がピッタリの日本最古(?)の映画館。

Take | KEIKAN 山崎 完一  
私達にとっての  
近代化遺産



私にとっての近代化遺産は、狭義においては幕末より明治期以降において日本人が西洋の文化に接し、それによって現われ、そして現代まで伝えられた文化財と考えている。

ところが、この近代化遺産は昭和戦後30年間、その存続について大変な危機に遭遇した。その理由は簡単で、当時の日本人は自分が生まれた以降現われたものに対しては、あまりにも身近な存在でその歴史的意義まで思いが届かなかったからに他ならない。更にそれに追い討ちをかけるように、高度経済成長が拍車をかけた。これは近代化遺産に限らず文化財全体、そして環境破壊にまで至り、その対応に現代人は迫られている。

ここで文化財の概念の拡大について述べたい。私は昭和43年に文化財建造物保存の世界に出会った。以来40年間、その考え方がおおきく変わり、かつ幅広くなった。当時は中世以前に建てられた寺や社の建造物とその頂点にあり、その他については低い位置にあった。その後近世社寺建築、農家、町屋と云った民家、伝統的な集落や町並の保存、そして近代化遺産の掘起しと展開が図られている。この近代化の中には近代和風、近代寺社の建造物、そして近代産業遺産が含まれる。特にこの近代産業



遺産の研究は始まったばかりで、その価値付に対して多くの課題が含まれている。平成8年度からは国によって登録文化財制度が始まり、おおむね50年以上経たものについては文化財としての価値を認めることを主旨としている。そして今や文化的景観が制度として現われた。又、昭和戦後の建造物も重要文化財の指定を受けている。私にとっての40年はまさに激変する文化財の世界である。

それに関連して、私の経験を紹介したい。私は今まで、県内外を含めて行政から文化財建造物の悉皆調査をいくつか依頼された。文字通りしらみつぶしに古い建造物を見る調査であるが、結果としてその大部分は近代期以降につくられたものである。このことは私達の日常生活の中に文化財があると言って良い。この視点が重要で、冒頭で述べたようにあまりにも身近で新しいものに対してその歴史的価値を認めにくい危うさを含みながらも、その反面遠い先祖から連続として伝えられた文化遺産であるという視点が必要でないだろうか。身近なものも文化財なのである。

そして文化財は人間の精神を豊かに育んでくれるはずである。



山崎完一 プロフィール

昭和22年新潟県出雲崎町に生まれる。財団法人文化財建造物保存技術協会を経て、建築設計事務所勤務。平成6年より文化財ネットワーク21の事務局長として、歴史的建造物やまちなみの保存活用をテーマに全国の人々とのネットワークを広げている。一級建築士。



# 文化振興課からのお知らせ

私たちの身のまわりに広がる日々の「景観」は、先人がつくり、まもり、はぐくんできた地域の大切な宝物です。私たちはそれらの価値を見出し、これを共有し、更に研ぎをかけて質を高め、大きくそだて、次の世代に引き継いで行かなければなりません。ここでは、景観形成に向けた市の取組みについて紹介します。



## 景観法が制定されました。

(全面施行：平成 17 年 6 月 1 日)

法制定の「目的」は、我が国の都市、農山漁村における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することです。

## 上越市は、「景観行政団体」になりました。

より良好な景観を推進するために、県との協議・同意により、平成 19 年 7 月 1 日に「景観行政団体」になり、現行の「上越市景観形成基本計画」の考え方を継承し、景観法に基づく「景観計画」を策定しています。

計画策定後には、条例を改正し、市民の皆さんからご協力をいただきながら施策を推進していきます。

## 「町家交流館高田小町」

百年の時を超え、現代に生まれ変わった町家です。集会、イベント、文化活動のほか、城下町高田のまちなか散策の休憩・案内所としてご活用ください。利用申し込みは、直接「町家交流館高田小町」(TEL 025-526-8103) まで。

## 景観セミナーの実施

上越市では、景観形成に対する意識高揚、知識向上のため、平成 12 年度より色彩、照明、サイン(案内標識)などをテーマに「景観セミナー」を実施してきました。

平成 18 年度は、雁木通りの看板類を、まちなみに調和したデザイン、色彩となるよう一時的に地元住民の方々と簡易修景作業を行い、看板の重要性や認識を高めました。

また、平成 19 年度は、行政の職員を対象に「まちのお手本」と題して、まちの色彩、照明、サインについて学び、考え、実践にいかしてもらおう場を設定しました。

皆さんも機会がありましたら、ぜひ参加してください。



修景作業



景観セミナー「まちのお手本」

景観形成に  
重大な影響を及ぼす  
行為の届出と  
景観アドバイザー  
制度について

市では、適正な景観形成への誘導を図るため、上越市景観条例に基づいて、「景観形成に重大な影響を及ぼす行為」の届出制度を設けており、一定規模を超える建築物等の新築、改築、大規模な修繕、外観の模様替え及び色彩の変更などに際しては届出が必要です。

<平成 18 年度は 138 件、平成 19 年度は 113 件の届出がありました。>

また、届出にあたり、建築物や工作物、広告物などのデザイン、色彩などについて、周辺景観に調和させるにはどのような配慮をしたらよいかなどの視点から、専門家によるアドバイスを月に 1 度実施しています。

<平成 18 年度 68 件、平成 19 年度は 74 件の相談案件があり、その内の約 5 割は色彩関係で、その他は照明とサインについてのアドバイスを実施しました。>

制度の詳細については、市のホームページをご覧ください。文化振興課までお問い合わせください。

上越市文化振興課

検索

## 読者からのお便り

景観第 7 号にたくさんのご感想をお寄せいただきありがとうございます。一部をご紹介します。

建築物、広告物など新、改築に際して、周辺の景観に調和するように本誌で「景観アドバイザー制度」があることを知りました。そのアドバイスの事例の飯の交差点のお店に行ってみました。背景の緑と空の青にマッチした外壁の薄い色が素敵でした。そして、そのお店で食事をして思った。この制度を活用してよい街にしてほしいと！

(市内 64 歳男性)

誌面の質の高さに感動しました。そして改めて上越の良さを教えていただいたように思います。下手なガイドブックよりもこの一冊を持って市内を回ってみたいです。次号も楽しみにしております。

(市内 44 歳女性)

懐かしい画面、昔と今、違和感なくみられる素晴らしいものでした。合併して市域も拡大してその地域に数多くの文化遺産があるわけですし、発掘して…次号に期待しております。

(市内 80 歳男性)

今回は写真がすばらしかったです。遠い記憶の中から眠っていた景色が呼び戻された感じでした。まだまだ残しておきたい町並み、路地、橋などがあると思います。

(静岡市 63 歳男性)

## 編集後記

ほぼ一年間、編集委員みんなで中ノ俣の集落を訪ねてきました。人々の暮らしが作りあげる「景観」を中ノ俣集落に見ようと思ったのです。田植も稲刈りも見せていただきました。お祭りやドンド焼きに集落の底力を感じました。たくさんの人達との出会いもありました。中ノ俣の皆さんありがとうございました。確かな、人々の日々の暮らしが「景観」を作りあげているのだと、あらためて感じました。(と)

編集委員 佐藤和夫(出版業/本誌編集長)

太田均(デザイナー/本誌アートディレクター)

せきゆうこ(建築家)

樋口喜美代(イラストレーター)

渡邊 恵美(NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部)

発行/上越市企画・地域振興部 文化振興課